自由南アフリカの声
Voice of Free South Africa

2013 年 2 月

No. 61

～１冊の本が人生を変える～

発行　／　アジア・アフリカと共に歩む会

Together with Africa and Asia Association (TAAA)

TAAA20 周年記念特集

グラビア写真と表紙の説明　２
２０年の歩みを振り返る　３
ＴＡＡＡ創立２０周年記念に向けて　６
南アの人たちと共に歩む　８
皆さんからのひとこと　１０
南アの皆さんからのひとこと　１９
ＴＡＡＡ創立２０周年記念報告会　２１
ＴＡＡＡの年譜　２２
主な活動　２３
寄付を下さった方々　２４

ンドウェドウェ・クワシャンガセ小の本が大好きな生徒たち

うしろは TAAA 南ア代表　平林薫

コンテナー利用の図書館が学校に到着した

日本から到着した中古のサッカーボールですぐ試合を始めた女子生徒たち

ウグ郡の道

さあ、畑を耕すぞ、と張り切る男子生徒たち

～表紙の写真について～

彼らは移動図書館車の巡回を本当に楽しみにしていて、移動図書館車から本を借りるようになってからしっかりと勉強するようになり、放課後や休暇中も悪いことに関わらなくなった、と教師が話していました。みんな恥ずかしがりながらも私のところに来てコミュニケーションを取ろうとして、“何借りたの？”“数学の本”“よく勉強してね”“はい”なんていうやり取りがありました。もうみんな高校生でしょうね。どうしてるかな・・・。考えたらンドウェドウェの何百人（もしかして何千人？）もの生徒と短い時間だけれど関わって、彼らはこれから 5 年後、10 年後に活躍する若者になるのですよね。いろいろな形での“再会”が楽しみです。（平林 薫）

20 年の歩みを振り返る

野田千香子

前 TAAA 代表　現事務局長

TAAA の設立時期　～日本と南アの関係～

上：初めて本がキンバリーに到着しました。

下：筆者、マツィーラ ANC 東京事務所代表、大友深雪さん

1992 年から私が「アジア・アフリカと共に歩む会」TAAA の代表を勤めて 18 年が経ちました。2 年前に、代表を久我祐子が引き継ぎ、私は事務局長を勤めることになりました。久我祐子を中心にスタッフの新体制ができ、新たな TAAA の歴史が始まろうとしているこの時期に 21年目を迎えることができたことを嬉しく思っています。

1992 年 4 月、埼玉県労働会館に東京 ANC 事務所代表のジェリー・マツィーラ氏と「南アの教育を支える会」の大友深雪さんを講師に迎えて、南アフリカの教育事情をテーマに講演会を行なったことが TAAA 創立のきっかけになりました。TAAA の出発点となったのです。

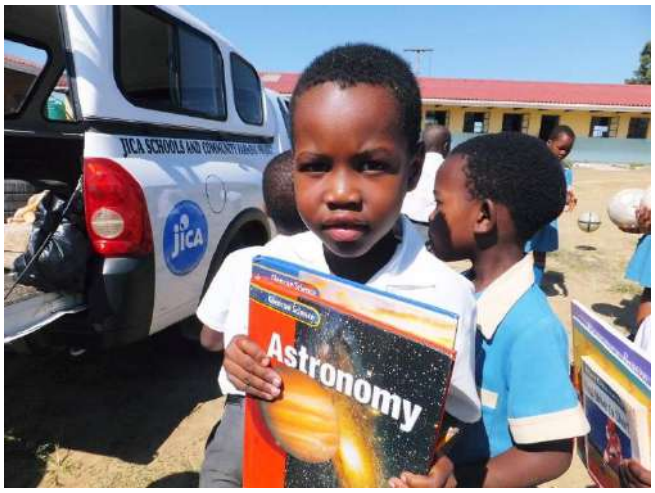
1990 年に元大統領のマンデラ氏が 27 年間の獄中生活から解放され、アパルトヘイトは終焉に向かい、南アフリカ共和国は新しい民主国家に生まれ変わろうとしていました。1992 年から 1994 年の南アは、長く続いたアパルトヘイトを終わらせ、民主的な国造りの準備期間でありました。内戦を回避し、和解と融和の精神で何回もの危機を乗り越えて、新憲法を制定し、1994 年 4 月には、世界の耳目を集めた熱狂的な黒人初参加の総選挙によって、マンデラ氏が大統領になりました。世界中が南アを見つめ、喜びに満ちた時期でした。

国連が南アのアパルトヘイトに反対するために経済制裁を決めた 1980 年代半ばに、日本は名誉白人と呼ばれ、南アとの貿易高が世界一となったことは、南アの人達に申し訳ないことでした。そのような気持ちも手伝って民主的な南アに生まれ変わる手伝いを少しでもしたい、子どもたちも平等な教育条件のもとに育っていってほしいと私たちは願い、黒人の学校にほとんど本が無いことを知って、不足している英語の本や教科書を日本で集めて、南アの学校や識字の教室に送り始めたのが 1992 年の夏でした。

反アパルトヘイトの拠点として日本に置かれた ANC 東京事務所に私はボランティアとして通っていましたが、事務所のチーフであった津山直子さんが 1992 年には事務所を辞めて、国際ボランティアセンターの南ア支援プロジェクトを開始されたのは、私には南アへの関わりと言う点で衝撃的なことでした。アパルトヘイトの後遺症をケアし、南ア建設を支援するという切り替えの速さは、本当に南アを深く知る人のできる事だと思いました。

中学の教科書から英語の小説までを送る

浦和市（現さいたま市）に住む 3 人ほどが中心になって、英語の中学の教科書集めを呼びかけたことが、TAAA のその後の 20 年の活動に繋がったのでした。南アの地方の女性リーダーが来日した際、南アの黒人の特に女性はほとんど学校に行けずに育った



人が多く、字が読めないために日常生活にも不自由している、識字教室のために英語の教科書が欲しい、という訴えを聞きました。すぐに、高校に中学の時使った英語の教科書を集めてほしいと依頼しました。これが新聞にも報道され、英語の教科書は次々に寄贈されてきました。小包で送った本は、キンバリーの郊外の女性のリーダーに届き、大いに利用されていることが報告されてきました。キッチンのテーブルを囲んで中年の女性達が日本で使われたNewCrownなどの教科書を持って、勉強している写真を日本の NGO の方が送って下さいました。

新聞の報道によって、教科書以外にも英語の本が大量に送られてくるようになり、1 年もすると、郵送費が追い付かなくなりました。(株)商船三井に相談したところ、電話一本で海上輸送を無料で引き受けてくださるという了承をいただき、それは今日まで 18 年間、続いているのです。

「アジア・アフリカと共に歩む会」(TAAA)は、志の大きい名前ですが今日に至るまで、南アフリカ支援のみに汲々として関わり続けることになったのでした。南アフリカの地域とそこに暮らすかたがたや学校を親しく知るようになると、日本からの本がどんなに必要とされているか、がひしひしと分かり、支援を継続していくのが当たり前であって、途中でやめるという選択肢は一度もありませんでした。

移動図書館車を南アの各地へ

1996年からは、日本で廃車となる移動図書館車を28台、南アの各地に送ってきました。不足している本を広大な地域で有効に利用していくためには、南アでの移動図書館の果たす役割は大きいのです。TAAA が送った移動図書館車は西ケープ州、ハウテン州、クワズールーナタール州、フリーステート州で、教育省や地元の NGO によって運行されています。そのうちの1台は、クワズールーナタール州の TAAA 南ア事務所が管理し、読書指導を行いながら、地方の20の学校を巡回しています。

2001年からは元 ANC 東京事務所のスタッフを勤めていた平林薫が TAAA の常駐スタッフとして、TAAA の活動に専念しています。最初は、ジョハネスバーグに住んでいた平林は、2004年以降は TAAA の活動地域に近いダーバンに移り、今はダーバンよりさらに車で1時間半離れた活動地域の中に住んでいます。支援をするというより、地域の学校の問題に南アの先生や生徒たちと一緒に取り組み、地域の人達の喜びはそのまま、平林自身の喜びなのだということが分かります。それを支えることが私たち国内のスタッフの活動となっていると思います。今では、日本で使用済みの算数セットやサッカーボールも広く呼びかけて、収集し、本と一緒に平林を通じて、活動の中で学校へ配布しています。

TAAA スタッフは余暇に活動する無給ボランティア

TAAA は20年、続いてきましたが専従のスタッフは国内にはいません。会社員、教員、公務員、主婦、学生・・・それぞれが出来る範囲で自分の時間をボランティアとして提供して、担って来た活動です。これまでも今も多くのスタッフが少しずつの余暇を使っても、無理せずに取り組んでいます。TAAA を資金面や本・サッカーボール・算数セット寄贈という形で支援して下さる方も、日本全国にたくさんおられます。20年、一度もお会いすることが無いまま、寄付を続けて下さっている方もおられます。TAAA は常に400人位の方々によって、支えられてきています。

学校図書館支援・移動図書館巡回・学校菜園・サッカー支援

南アのクワズールーナタール州のダーバンから1時間南下したヒバディーンに在住する平林を中心に、数100の学校と密接なつながりと信頼関係を保ちながら、歩んできました。これまで、図書支援、読書指導、図書室の設置、移動図書館車巡回、エイズについてのピア教育、有機農業による菜園の推進、サッカーボール支援とサッカーを通じた交流など、無理の無いやり方で自然に活動内容も多様になってきました。しかし、その中心にはいつも地域の「学校」があり、活動は、「学校」からはじまっていきます。南アの、特に田舎では、「学校」がコミュニティの人達（家庭）と繋がれる場なのです。中学の英語の教科書を小包数箱送った1992年から、TAAA は千里の道も一歩から、と言われるように、ひとつひとつ目の前の課題を南アの学校と共に乗り越えて、歩んできました。平林は、多くの学校の校長先生や先生たちと、常に一緒に歩んできました。

少しずつ充実してきた図書室を持つ学校では、本を好きな生徒たちが図書委員会を作り、自分たちで本の管理や読書のイベントを行うようになってきました。

これまでに28台、送った移動図書館車について、1996年に送った車は、その時点ですでに10数年日本で、稼働されていたものですから、今では、30歳を越える長寿です。これはハウテン州で大切にメンテナンスしながら、NGO が黒人の町（人種による住み分けは法律的には無くなりましたが、例えば、このデベトンに白人が足を踏み入れる事さえ、ほとんどないのが実情です）の学校を、巡回しています。平林の住むクワズールーナタール州でも10数台の移動図書館車が州政府の管理のもとに学校を回っています。

学校の卒業生も巻き込んだ有機農業の菜園促進も始まろうとしています。地域の仕事のない若者が母校の学校菜園への取り組みと協働しながら、自分たちの自立への道を歩もうとしています。

1,000個以上、送ったサッカーボールは、ポリ袋を丸めて縛ったボール代用品に代わり、もともと運動神経の優れた南アの子どもたちは、喜々としてサッカーに取り組んでいます。日本で少年サッカーのコーチをしている TAAA 会員がサッカー練習用のマニュアルを作成して送ることもしています。

地域の人達で持続していけるプロジェクトにしていく

南ア側における TAAA の活動の特色を二つ、上げるとすると、平林薫が南アの活動地域に住み続けて、南アのひとたちと一緒にプロジェクトを行なっていることと、もう一つは南アの延べ数100校の教師や生徒たちと、深く関わり合いながら、支援プロジェクトを進めてきたということです。そのような学校との信頼関係の中から、学校菜園のプロジェクトも自然な流れで行うようになったのです。国内においても、南アにおいても、TAAA は無理なことはしません。南アの人達の望むこと、達成しようとしていることに、少しお手伝いをいっしょにすることによって、南アの人達は自分たちでやったのだ、やればできるのだという達成感を持ってくれていると思います。

一定の期間、その地域のいくつかの学校やコミュニティの人達と手を組んでプロジェクトを行なったのちに、TAAA がそこから離れて他の地域の学校群に活動拠点を移しても、前の地域でプロジェクトが彼ら自身の力で続行していけることを念頭に、TAAA はプロジェクトを実施しています。これからもこうした TAAA の姿勢は変わりません。

アパルトヘイトによって長年、苦しんできた南アフリカの黒人の人たちが、政治的自由は得たけれど、さらに拡大する経済格差によって、教育条件の格差はなかなか改善されて行かないのが実情です。育ちゆく子どもたちが少しでも充実した人生を送れることを願いながら、TAAA は南アの TAAA と共に、今後も日本から声援を送っていきたいと思います。

TAAA 創立 20 周年記念に向けて

久我 祐子
TAAA 代表

「けしてけして白人が黒人を抑圧することのない社会を、そして、けしてけして、黒人が白人を抑圧することのない国へ」　1994 年に南アフリカ共和国は、初の全人種参加の選挙により、民主主義国家として新生しました。その時のマンデラ氏の大統領就演説を私はテレビでみていましたが、何度も「Never, never never」と繰り返す力強い演説に、鳥肌がたつほどの感動を覚えたことを昨日のことのように覚えています。「けして差別はしない」という精神は、そのまま南アフリカの憲法にも刻まれていて、憲法の条項に、人種だけでなく、性別、配偶者の有無、信条、宗教などでのあらゆる差別を禁止しています。私は、細かく明記された「反差別」憲法の下地に、人権蹂躙との長い戦いから培われた個への尊厳尊重と南アフリカ人の伝統的な人間愛を読み取るのです。

平林、野田、サンディーレ、筆者（２０周年記念報告会にて）

「アジア・アフリカと共に歩む会」は、ネルソン・マンデラ氏が釈放された 2 年後、そして世界中の人々が歓喜し歓迎した新生南ア誕生の 2 年前という過渡期の 1992 年に、埼玉県で発足した小さな市民グループです。

当時私は、ANC 東京事務所でボランティアをしていましたが、南アフリカから派遣されて来ていたマッツィーラ代表の口癖は「これからは、教育が大切だ。教育支援に携わってくれ」でした。ANC 東京事務所を通して知った TAAA に私がかかわるようになったのは、なにかとても自然な流れでした。

アパルトヘイト後に、反差別を掲げ、報復ではなく和解を武器に国作りを進めてきた南アフリカ共和国に対し、私は深い尊敬の気持ちを持っています。そして心の底から尊敬する国の子供たちの可能性を広げる教育支援に、ささやかながらかかわってきたことをとても嬉しく、また有り難く思っています。
また、支援する側、される側といった関係を超えて、日本の一般市民である私たちが誰に命令されるわけでもなく、南アフリカの NGO や村の人たちと「ああでもない」「こうでもない」と話し合いながら、２０年間も交流やつながりができたことを何よりも嬉しく思っています。
東日本大震災後、南アから多くのお見舞いのメッセージが届きました。なかには金銭的な支援をしたいといってくれた人もいます。
南アの人たちは、私達との関係を「支援する側、される側」ではなく、「困った時はお互い様」的な気持ちで付き合ってくれていたのだな、と改めて思いました。

アパルトヘイト時代、人種ごとに住む地域が決められていたため、民主主義国家になっても、白人は隣町のタウンシップと呼ばれていた旧黒人居住区に足を踏み入れることには、心理的に大きなハードルがありました。TAAA がジョハネスバーグ近郊に送った移動図書館車は、1996 年から旧タウンシップの学校を巡回してきましたが、現在は隣町の高齢の白人

学校の菜園に丁寧に水やりをしています。

女性が中心に運行し、本の貸し出しだけでなく、読み聞かせや英語教育をしています。「Gogo's project」（おばあちゃんたちのプロジェクト）といって、子供たちに英語教育だけでなくスキンシップもたっぷり与え、人種ミックスの地元住民の手による地元のプロジェクトとして定着しています。日本で廃車となった移動図書館車が南アに渡り、教育支援だけでなく、南アの人々の間の架け橋としても活躍してくれているのです。

2001 年から南アに日本人のプロジェクトマネージャーが常駐するようになってからは、移動図書館車プロジェクトを直接運行したり、学校菜園プロジェクト、サッカープロジェクトを行うことで、ダイレクトに学校にコミットするようになり、草の根での交流はより深まりました。　プロジェクトマネージャーが地域住人となることで、地域事情や生徒たちの日常生活を詳しく知ることになり、彼らを「支援対象校の生徒」から「学校に通う村の子ども」の視点で見ることができるようになってきました。
最近は、地元住民の小さな地域開発グループと協力して、児童や若者への活動を始めています。

教育支援は、成果が直ぐに形や数値では現れるものではありません。だからこそ私たちは長く細く続けることで、南アの人たちと息の長い付き合いができてきたのではないかと思います。

会の創立２０周年記念年にあたり、改めて２０年間の活動やそれを通して培われた南アの人たちとの関わりを感慨深く、また私たちをあらゆる角度から支えてくださった多くの方々に対して感謝の気持ちでいっぱいになります。
しかし、その一方で、少し視点を広げてこの２０年間を振り返ると、正直複雑な気持ちにもなります。

世界中の人々が歓喜した南アの新生。しかし、私たちはこのエポックメイキングな出来事から、自分たちの住む国や社会と照らし合わせて、いったい何を学んだのでしょうか。

南アの固有名詞のアパルトヘイトは無くなりました。しかし、アメリカの９９％デモや日本の派遣村が象徴するように、グローバルに経済格差が広がり、普通名詞的な経済アパルトヘイトが世界に広がった２０年ではなかったのでしょうか。そして人々の価値観も「勝ち組」「負け組」などという言葉を生み出すほど経済アパルトヘイト的になってきたのではないでしょうか。
南アフリカを支援しながら、私は足元の日本や世界がまるでアパルトヘイト時代の南ア経済を目指すかのような方向に進んでいることに、一市民の肌感覚として違和感を覚えてきた２０年間でもありました。　そして、南アも国の経済力が高まる一方で、経済格差は縮まるどころか拡大し、現在でも多くの人々が困窮生活を余儀なくされています。

極端な経済格差は、どうしても差別を生み出すものだと思います。格差社会での貧困は人間の尊厳を貶めます。　徹底した反差別精神の憲法を持つ南アには、率先して経済格差に取り組んでほしいと願っていますが、新生南アを迎えた時、世界が格差を容認するグローバル化に進んでいたことは、南アにとって不幸なことだったと思います。

新生南アを歓喜で迎えた世界は、政治家、学者から私のような一般市民まで、それぞれが、もう一度南アの歴史を振り返り、南アが成したことと、成しえなかったことの意味を、自分たちが住む社会と照らし合わせ、自分たちの「宿題」として、考え学びなおす時期なのではないかと思います。

TAAA は未だに小さな市民団体です。そのよさを生かしてこれからも細々とでもきめ細やかに南アの人々とかかわっていきたいと思っています。　その一方で、日本の市民社会に、プロジェクトの活動内容だけでなく、上の「宿題」の意味もかねて、南アという国を色々な角度から紹介していきたいと思っています。
今後とも暖かいご支援、アドバイスをどうぞよろしくお願い申し上げます。

南アの人たちと共に歩む

平林　薫

TAAA 南アフリカ事務所代表

南アの魅力に惹かれて

この 20 年、TAAA と同様に私自身も南アフリカと共に歩んできました。1993 年初めに ANC 東京事務所でセクレタリーとして勤務したことが南アと関わるきっかけとなりましたが、当時は毎日南アのこと、ANC のことを学ぶべく南アの歴史を振り返りながら、刻々と変化していく現地の状況に対応していました。1994 年 4 月に初の民主的選挙が行われ、マンデラ大統領が誕生した後、ANC 東京事務所は閉鎖されましたが、次の仕事に移る前にぜひ現地を見てみたいと思いました。その年の南アの冬、7 月中旬から一カ月の南ア訪問は、私の人生を変えたといえます。ダーバンから南に異動した際、バスの中からボーっと海を眺めながら“こんなところに住みたいな。いや、住もう！”と思ったとき“Hibberdene”という地名が目に飛び込んできました。あれから 18 年、今私はその地にいます。

右は筆者

初めての訪問で南アに一目惚れしてしまった訳ですが、南アのどこにそんなに惹かれるかと言えば、その大自然(特に海！)、文化の多様性、おいしい食事などいろいろあります。しかし、何といっても一番の魅力はそこに住む人々です。アパルトヘイトという徹底的な差別、抑圧、不平等の中で生きてきた人たちが、何故こんなにもやさしく、明るく、のんびりとしているのか、驚きを超えてショックを受け、もっとこの社会や人々について知りたい、との思いを強くしました。もちろん、当時は国が変わったばかりで、人々は希望に満ちていたこともあります。私は南ア社会の変化の中に身を置き、長くつらい思いをしてきた人たちが幸せになっていく姿を間近に見たいと思いました。

南ア行きをあきらめずにいたところ、たくさんの方々との出会いとサポートにより南アベースで仕事ができるようになったのですが、その間、いつも地元の人たちと共に活動がしたいと思っていました。ジョハネスバーグのストリートワイズでのボランティア活動を通して一層その思いが強くなっていた頃、TAAA 野田代表（当時）と話をして TAAA 南ア連絡員として活動させてもらえる機会が訪れました。TAAA のことは ANC の頃から知っていましたが、野田さんやメンバーの方たちの地道な活動と、南アの人々や子供たちに対する思いに共感し、このタイミングでメンバーとなって本格的に支援活動に携わることになりました。本の寄贈先を訪問したり、現地団体の移動図書館活動を視察したりする中で、自分が“南アでやりたかったこと”が明確になってきました。

その後、現地 NGO や州教育省の図書支援活動をサポートしていた時、ダーバンに拠点を置く NGO の ELET から一緒に活動を行おうという提案をもらい、JICA 草の根技術協力事業で HIV/AIDS ピア教育プロジェクトを立案しました。私にとってはプロジェクトマネージャーとしての初めての事業で、ELET からはプロジェクトの管理方法や人材の配置、活動の進め方など、本当に多くのことを学びました。これを機にジョハネスバーグから“ズールー人の本拠地”ダーバンに移ることになり、ンドウェドウェ地域の学校での活動が始まりました。その後、同地域で図書活動、菜園活動と学校を拠点とした支援活動を継続して行いました。

南アの経済格差を縮めたい

南アではますます広がる経済格差が教育格差につながっています。経済的に余裕がある家庭の子供たちは設備の良い、教育内容の質の高い学校に通うことができますが、多くの黒人家庭の子供たちは学校を選ぶことはできません。南アの教育システムの改善には、まず社会のあらゆる分野での変革が必要です。失業率が圧倒的に高い遠隔地域において、例えば、生徒が勉強に集中できるよう十分な食事がとれているか、必要な教材の購入や、高等教育を受けるための資金は十分にあ

るかなど、生徒の家庭の生活改善は最重要課題です。また、地域のインフラ整備や教師の通勤手段の確保と改善、教師の知識や経験を伸ばす機会を作ること、生徒に課外活動やクラブ活動、余暇を楽しむ機会を与えることなど、本当にたくさんの課題を抱えています。これらが改善されなければ、町の学校と遠隔地の学校における生徒の学力の差など、あらゆる格差は縮まりません。
私たちは、このようなギャップを少しでも縮めることを目標として、あらゆる角度から支援活動を行っています。

学校菜園で有機農業を学ぶ生徒たち

南アの遠隔地では、いまだに十分な設備や教材のない学校が多くあり、改善には莫大な予算がかかることから、全国の学校に対応するのに時間がかかっています。そのため、TAAA から贈られる本やサッカーボールは大変喜ばれ、有効に利用されており、教師や生徒のモチベーションを高めることにつながっています。また、国際ボランティア貯金の図書活動支援プロジェクトによるコンテナー図書室や本棚の寄贈は、今後学校が自分たちの力で活動を進めていくためのきっかけとなっています。もちろん、物資の援助だけでなく、学校で教師がこれまでに学ぶ機会がなかった図書館の利用法や本の使い方について研修会を開催し、先生方をエンパワーすることにも力を入れています。現在 TAAA 南ア事務所では、移動図書館車を一台保有して（日本名：きぼう号、ズールー名：イテンバ号）学校巡回訪問、本の貸出しを行っており、生徒が読書の楽しさを経験しています。設備や教材が不足している学校での図書室設置と図書活動への支援は、いくらやっても不十分に感じますが、あせらず、学校の自主的活動を後押しする形で継続して行っていくことが大切だと思っています。

学校はコミュニティーの中心、学校を拠点に

学校はコミュニティーの中心であり、学校での活動は、保護者、地域住民への情報提供や生活改善へのサポートにもつながることを認識しました。菜園活動を例にとると、南アの遠隔地では歴史的、伝統的要因から小規模農業が行われておらず、地域の人々にとって農業といえば白人大農場、また基本的に“畑作りはおばあちゃんの仕事”という意識を持っています。しかし、学校で菜園活動を行うことで生徒が教育として畑作りを学び、家族と共に家庭菜園を始め、収穫を得ることで地域の人々が農業の重要性を認識し始めました。私たちは、身近に入手できるものを最大限に有効利用する有機栽培による菜園活動を行っており、コストを抑え、地域の環境に合った活動であることから、学校や地域住民が継続して畑作りを行う意欲を見せています。地域の問題の解決や改善に向けた取り組みを行う時、活動の主役は学校の先生であり、生徒であり、地域の人たちです。彼らが“よし、やろう”と前向きに立ち上がって初めて活動が進んでいきます。

昨年 12 月末に 2 年半にわたる JICA 事業“学校を拠点とした農業促進プロジェクト”が終了しました。有機農業への情熱と経験を持った専門家の研修によって教師たちは菜園活動への興味を深め、熱意を持って活動に取り組みました。また、生徒たちが畑作りに携わることで自分の興味や才能を見出し、伸ばしていく機会となったことで、“畑仕事、大好き”“お母さんに教えている”と誇らしげに話す生徒もいます。特に男子生徒の活躍が見られ、地域の人々の畑仕事に対する偏見の払拭や、将来就農する若者が出てくることも期待されます。物資や資金を提供するだけの一方通行的な支援活動には限界がありますが、物やお金では得られない経験や繋がりを通した支援はずっと続けていかれると思います。また将来、小規模ビジネスを通して、相互に利益をもたらす関係を作ることもできるかもしれません。

南アではかつてアパルトヘイトに抵抗するためにしばしば暴力が手段として用いられました。これは現在にも影響を及ぼしており、人々が、一向に変わらない社会に対するいら立ちや怒りを破壊することで表現する姿が見られます。“壊す”のではなく“作り出す”ことの大切さはわかっていても、自分たちにはリソースもスキルもなく、何からどのように始めたらいいのかわからない、どうせ自分には何もできない、とあきらめてしまうこともあるでしょう。このような状況の中では、たとえ小規模でも畑作りをすることで、自分たちの手で作り出す喜びを感じることができ、自信にもつながります。活動では、目に見える成果に向けた取り組みはもちろんですが、目には見えない心の部分への応援も大切だと考えています。その意味でも、サッカーを通した支援と交流の活動は、青少年の健全な心と身体の育成に大きな力となっています。

TAAA の“Together with”は私たちメンバー全員の思いを表していると思います。1 人では難しいことも、誰かと一緒に考えれば新しいアイディアが浮かび、一歩前進することができます。そうやって繋がっていくうちに大きな目標を達成できるかもしれません。“南アの人たちと共に歩んでいく”そう決心した私にとって、活動は毎日の生活そのものとなっています。

～皆さんからのひとこと～

TAAA のスタッフ（アイウエオ順）

インターナショナル・スクールから本の引き取り　浅見と北爪

浅見　克則（会長）

たまにパッキングの手伝いに来ていた子供達も其々に子の親になった。20 年の歳月は短いようで長く、長いようで短い。野田前代表と興した此の活動を振り返ると私の役割はひたすら CARRY ABOUT。最初は車の屋根に迄こぼれんばかりの古着。千葉の仕訳場まで 2 回に亘って運んだ。仕訳に飽きてジェリー・マツイーラとリフテイングの競争をしたのが昨日の様に想い出される。この運搬がこの会の発足につながった。僕の好きなユニス・コマネの要望の中の本に着目したのは野田代表。「本なら何とかなるわよね!!」と言って同意を求める目に抗う理由が見つからなかった。

この日から本運び係。女子高に教科書を貰いに行っているうちは序の口、アメリカンスクール、インターナショナル、基地内のスクールとだんだんエスカレートし乗用車からバンに、バンから 2 トン 3 トン 4 トンと限りなく UP。体力の落ち込みと反比例し一回の輸送量は増える一方。途中から図書館車の搬送も始まった。埼玉県内からスタートし関東一円、長野県、愛知県、大阪近郊まで図書館車を転がしてくる出張が暫く続いた。輸出の為の整備、手続き、ETC。この頃が車に対する知識が活用できたこの会における僕のピーク。　図書館車の寄贈が終わった今、再び主たる任務は本の搬送に戻った訳だが本の供給元のインターナショナルが閉鎖、縮小、更には E-BOOK 化で図書の廃止等、今後図書の入手が段々厳しくなる方向にある事は必定。次の 10 年には会のコンセプトも量から質への転換が迫られる時期が来るかもしれない。

大友　深雪

反アパルトヘイト啓発活動と並行してＡＮＣ東京事務所の提起・仲介で始まった Black Educational Empowerment 支援活動の一角を担って以来、他のほとんどの団体が消滅する中で、その組織的開放性・先見性・行動力によって持続・発展してきたＴＡＡＡの活動が２１年目を迎えようとしている今日、とても複雑な気持ちにかられます。それは、日本の原発事故への対応や南アでストライキ中のプラチナ鉱山労働者の警察による射殺に象徴されるように、「金持の特権維持」のための「貧乏人の犠牲」を止められないどころかますますのさばらせてしまっている現状があるからです。「限りある土地と富と生産手段を、そこに生きるもの全員の間で可能な限り平等に分かち合おう」という「自由憲章」の理念実現にむけた活動を日本でも南アでもどう展開していけるかが、古くて新しい課題だと思います。両草の根の好ましい協力・連帯をめざして知恵を出し合っていきましょう。

北爪　健一（図書部長）

善きも悪しきも本会に取って変革の時期であったと思わざるを得ない。

一つには、移動図書館車が送れないこととなった。理由は自国の車産業を保護するためと聞く。産業構造に対する批判は避けるが果たして、あの仕様の車が南アフリカで建造できるか否か疑問である。車高の低いワンボックス車の中に書架を設える位なら可能だが、車の外側から本が選べるような設備となると全く無理としか言えない。無理とは技術不足も然ること、公共図書館自体が移動図書館車を必要としていないからであろう。我が国の公共図書館は欧米を模倣し、移動図書館車の有用性を体験し、1950 年頃から公共図書館が移動図書館車の建造メーカーを育ててきた。

移動図書館車を送るに辺り、本会では全国公共図書館の移動図書館保有状況を知り、寄贈のお願いに行き、また、受領に出向いた。その結果、会の活動に共鳴され快諾してくれた図書館、子ども達と一緒に寄贈セレモニーを開いて呉れた図書館も少なくなかった。中古車が送れなく、また、自国での移動図書館建造が出来ない以上、送ってある車の稼働を期待する昨今である。

鯨井　幸一

アジア・アフリカと共に歩む会（ＴＡＡＡ）創立２０周年、本当におめでとうございます。

私は、人生に於いて最も難しいことの一つが『一つのことを行い続ける』ことだと考えます。反アパルトヘイト時代、“雨後の筍”のように、沢山の南アフリカを支援するＮＧＯ・市民団体が設立されましたが、現在まで活動を続けているのは数える程ではないでしょうか？

ここまで長く活動出来たのも、偏に設立当初から会の運営を担っているメンバーの篤い情熱。そして、寄付をして下さる方々や、英語の本を寄贈してくださる支援者の皆さまのお蔭だと存じ上げます。

本来、ＴＡＡＡのような性質を持つ団体は、一刻も早く、活動を終えられた方が良いのだと思います。しかし、南アフリカの現状を見る限り、残念ながら、まだまだＴＡＡＡの活動は続きそうです。

一人でも多くの方が、ＴＡＡＡを通じて、南アフリカに関心を抱いて下さることを、願って已みません。

下谷　房道（副代表）

市民のＮＧＯが２０年という長さにわたって、地道に活動を継続してきたことはなんともすごいことだと思う。そしてこの２０年を振り返ると、世の中は絶えず大きく変化していることを実感する。

この会が発足した１９９２年頃の南アはどうであったろう。１９９０年２月にＡＮＣが合法化し、マンデラが釈放される。９３年にはマンデラとデクラークにノーベル平和賞が受賞され、９４年には南アで総選挙、同年５月にはマンデラ大統領の誕生をみた。そして９６年に全人種平等の南アフリカ共和国憲法が施行されている。長いアパルトヘイト体制がついに終焉を迎えた時期であった。

日本では１９９０年にバブル景気が崩壊し、９２年１０月には有効求人倍率が１，０を下回り就職氷河期に入っていった。その後「失われた１０年」はいつしか２０年にもなり、世界第２位の経済大国ニッポンはどこへやら。政治的には９３年に細川内閣が誕生し、５５年体制が崩壊したと大きなニュースとなっていた。

かくいう私も相応に年をとり、決して高校生に間違われることなどなくなった。そして高等学校で社会を教える私は果たして社会に出る生徒たちに正しく、有用な知識・情報を与えてきたのか自問してしまう。また社会は生徒、学生に将来のしかるべき活躍の場所を用意しているのかを考えてしまう。

そんな中、ＴＡＡＡの活動に少しでも関わってきたという事実は、私に何か確かなものを感じさせてくれるのである。また明日の見えない現状において、アパルトヘイト体制下で抑圧されてきた人々の声や姿に学ぶものを気づかせてくれる。

今はＴＡＡＡの活動に十分に参加できなくなっているが、息長く続けていきたいと思っている。

高野　千恵美（会計）

ＴＡＡＡ創立２０周年おめでとうございます。

私がＴＡＡＡの活動に参加してから２年が過ぎようとしています。娘が通っていた公文教室の先生が野田事務局長でした。当時、何か特別な事が出来る訳でもない私でも少しは役に立てる場所、無理なく続けていける場所があったら参加しようかと考えていました。英語の本を箱詰めする、しかも作業場は自宅近くのＴＡＡＡはそんな私にぴったりでした。

また参加し始めてまだ日も浅い頃に東日本大震災が起こり、被災した子供たちの為の「本と友達キャンペーン」では多くの支援下さる方、被災地で活動をされている方とつながりを持つことができました。

ＴＡＡＡが行っている支援は子供たちの心に「希望の種」を蒔いているのだと感じます。少しでも多くの子供たちに「希望の種」を蒔くことができるように、これからも作業場へ通い続けようと思います。

津山　直子（動く→動かす[GCAP JAPAN]代表）

TAAA 創立 20 周年、おめでとうございます。設立の頃に送った本を読んだ子どもたちは、もう 30 歳前後なっているのですね。どんな大人になっているか、本を読んだことがどんな影響を与えたか、と想像を膨らませると、長年の活動の意味や重さを感じることができます。私の好きな詩で、晏陽初という中国の教育者によるものなのですが、国際協力においても大切なことを述べていると思いますので紹介します。

人々の中へ行き/ 人々と共に住み/ 人々を愛し/ 人々から学びなさい
人々が知っていることから始め/ 人々が持っているものの上に築きなさい
しかし、本当にすぐれた指導者が/ 仕事をしたときには
その仕事が完成したとき/ 人々はこう言うでしょう/「我々がこれをやったのだ」と

左が西村　　右が下谷

TAAA が地元の人々と共に歩む一員として、これからも活動に関わっていきたいと思います。

西村　裕子

私が、TAAA に初めて参加した日は、１０年前。
その日の作業は、野田さんと下谷さんでした。「いつもは、もっと賑やかなのよ」と、野田さん。
パッキング作業は午前中だけにして、午後は、１０周年記念誌作成の打ち合わせでした。
何も分からず、お二人の打ち合わせを、聞いているだけでしたが、「もし１０年続けたら、その時は、２０周年記念だな～出来るかな～？」と、考えて、この先の自分がちょっと楽しみでした。そして次の月に来てみると、もっとたくさんの人が参加していて、賑やかでした。

その頃の TAAA は、のどかでしたね。 皆で集まって、自分達で会報の印刷をしたことも何度かありました。
フリマにも、２度参加して、売り上げを会へ寄付したことは、とても楽しい思い出です。

この１０年間で、TAAA の活動規模は、とても大きな成長をみせて、南アに根付きました。
日本から支えてきた野田さんを初めとするスタッフの皆さん、南アの広い大地を、日々、走り続けている平林さん。
日頃のご努力には、心よりご尊敬申し上げます。

今後も、お身体を充分大切に、大きな花が咲くようにと思っております。
２０周年おめでとうございます。

牧野　久美子（日本貿易振興機構アジア経済研究所研究員）

TAAA 創立 20 周年、おめでとうございます。

2012 年 8 月の日誌で、プンガシェ教育センターのドラミニ所長が、マンデラ元大統領が牢獄から解放されたとき、読書をしていたから世界の情勢をすべて知っていた、と読書の大切さを生徒たちに説いたエピソードが紹介されていましたが、実は、マンデラ氏は読書だけでなく、獄中で野菜作りにも精を出していたそうです（リチャード・ステンゲル著『信念に生きる：ネルソン・マンデラの行動哲学』英治出版、2012 年）。図書活動と菜園活動を二本柱とする現在の TAAA の活動は、まるでマンデラの生き方をモデルにしているかのようですね。

TAAA が活動を始めたきっかけは、当時の ANC 幹部が新しい国づくりのために人材育成を重視し、教育分野の支援を呼びかけたためと伺っています。それから 20 年が経ちましたが、残念ながら南アフリカの公教育はいまなお課題が多く、TAAA のような草の根の支援活動は、今後とも重要であると感じています。20 年間、毎月の作業を変わらず積み重ね、南アフリカの子どもたちの教育環境の改善に取り組んでこられた TAAA の活動に、心から敬意を表します。

丸岡　晶（副代表）

私がＴＡＡＡを知ったのは、オンライン寄付サイト（ギブワン）を通じてになります。
当時、勤務先で社会貢献の担当をしておりましたが、個人的にも何かしたくて、地元さいたま市にあるＮＧＯであるＴＡＡＡにたどり着きました。当初は気軽な気持ちで門をたたきましたが、早いもので数年がたってしまいました。

この間、南アの学校図書支援に加え、菜園プロジェクトやサッカープロジェクトなども行うようになり、その活動はますます充実したものとなっています。また、国内でも、アフリカンフェスタなどのイベントへの出展、各種インターネットサイトでの広報などを通じて、少しずつ認知されてきました。これも、メンバーの皆さんや支援して下さる方々のおかげであり、この場を借りて改めて感謝申し上げます。

今後も微力ではありますが、南アの子どもたちはもちろん、困難な立場にある人たちのために、細く長く寄り添って参りたいと思います。

南アでサッカーを指導する森直之（左）

森　直之（THAN 球プロジェクト代表）

ＴＡＡＡ創立２０周年を迎えられたのこと、心からお祝い申し上げます。

この２０年間で、たくさんの子供たちが助けられたのではないでしょうか。しかし、２０年経った現在でも苦しんでいる子供たちもたくさんいるのが現実です。私と TAAA との出会いは４年前であります。最初は、サッカーボールを送ればいいと思って活動していました。しかし、実際に南アに行き子供たちと出会い、「笑顔でサッカーを行なっている姿」を見て、サッカーを通して成長してもらいたいと思い指導活動も取り組みました。

きっと、野田さんも「図書」を通じ同じようなことを思ったのではないかと想っています。

野田さんをはじめ、浅見さん・北爪さん・平林さん・久我さん・鯨井さん・メンバーが一丸となって活動すれば問題が解決すると信じています。これからの活動に寄与できるよう私も全力で取り組んでいきたいと思っています。
創立２０周年おめでとうございます。

米山　周作

2006 年春、南アへの漠然とした憧れだけから TAAA に入会。同年夏に念願叶って 3 週間の南ア滞在が実現しましたが、この体験は生涯忘れることはないでしょう。資金も教材も充分にない学校で、移動図書館車の訪問を心待ちにしている子ども達・先生方の姿は非常に健気。物が溢れる東京の私立高校で教壇に立つ身としては、その純粋さに心が洗われる思いがしました。

秋の学園祭では南アについてのポスター展示を行い、バザー収益は TAAA に寄付させていただきました。
また翌年 4 月には「国際協力入門」という選択科目を立ち上げ、現在も高校生に国際協力について考えさせる授業を続けています。

今後も TAAA で得た種を、自分の持ち場でしっかりと撒いていきます。遠くアフリカで行われている草の根の活動を日本の次世代に伝え、後方支援の裾野を広げることが自分の役割だと思っています。
非常に微力ですが、南アでの原体験を胸に、今後も頑張っていきます！

渡　恵美子

アジア・アフリカと共に歩む会（ＴＡＡＡ）の創立２０周年、おめでとうございます。
家から、ネットを通して南アフリカ共和国の子どもたちの笑顔の写真を見て、とても元気をもらっています。
子どもたちを笑顔にする活動を、２０年もの長い間続けてこられているというのは、本当にすごいことだと思います。

私自身は、身体に障害があり出かけることが難しいために、なかなか参加できることも少ないのですが、数年前からホームページのお手伝いをさせていただき、ほんの些細な参加ですが、少しでも活動にかかわれることを嬉しく思っています。

これからも、ＴＡＡＡの活動が子どもたちの笑顔に貢献されていくことを願っています。
改めて、２０周年、おめでとうございます♪

いろいろな形でご支援くださっている方々

永田　順一（商船三井　経営企画部　CSR・環境室）

アジア・アフリカと共に歩む会創立２０周年おめでとうございます。

当社は創立当初から書籍及び移動図書館車輌の輸送等で支援させて頂いておりますが、これまでに輸送した車輌は２８台になります。

我々は海上輸送を通じ、エネルギー問題、食糧問題、環境問題等、様々な社会的問題の解決に取り組んでおります。教育問題及びそこから生まれる貧困問題の解決も大きな課題ですが、南アフリカの教育の底上げに貢献している御会を支援することは、当社にとっても大変意義深いものです。

図書館車輌は行く先々で大歓迎を受け、この支援活動は当社の中で広く知れ渡ることとなり、今では全世界の当社グループ役職員の誇りとなっております。

今後もこの有意義な活動を支援させて頂きたいと考えております。

今尾　宏子（JICA 市民参加協力調整員）

TAAA 会員、支援者の皆さま、初めまして。

JICA 地球ひろばで市民参加協力調整員を務めております今尾宏子と申します。

私は、2011 年 9 月に、当機構とのパートナー事業として 2012 年 12 月まで実施した『クワズールナタール州ウグ郡の学校を拠点とした地域農業促進プロジェクト』を現地で拝見させていただきました。事前に伺っていたのは、当地ではアパルトヘイトの歴史の中で、農民、農作業に対するネガティブなイメージがあり、豊富な土壌を活用することもせずに、就職がないと将来を悲観する若者が多い、ということでした。ところが、事業を実施する小学校や高校では、男の子も女の子も、嬉々として鍬やスコップをもち、畑仕事をしています。平林さんは「彼らは将来のファーマー」と本当に喜んでいらっしゃいました。こうした、現地の歴史を踏まえた人びとの意識というのはなかなか変えがたいものです。TAAA さんの、地道で根気強く、また現地の人びとをよく理解した活動によって、変化がもたらされたのだと強く感じました。

TAAA さんの益々のご発展と活動の継続を心からお祈り申し上げます。

斉藤　龍一郎（アフリカ日本協議会（AJF）事務局長）

反アパルトヘイト運動に今こそ学ぶべき

一昨年3月11日に発生した東日本大震災そして東電福島原発事故の影響は、今も日本全体に大きく及んでおり、私たち一人一人にどこへ向かって進んで いるのかを問いかけている。

僕自身は、そうした問いかけに対して答える試みとして、昨年秋に開始された経産省前脱原発テント、この春から始まった脱原発首相官邸前行動に強く 惹かれる。

福島原発事故は、これまで「当たり前」のこととしてきた、身の回りに置きたくない危険なものを貧困・前途への希望のなさ故に受け入れざるを得ない 地域に押し付け、また被曝労働を一部の労働者に押し付けてきた日本の姿を明るみに出した。こうした構造を変えていく闘いを進めるためにも、今こそ 反アパルトヘイト運動に学ぶべきと感じている。

反アパルトヘイト運動への連帯を出発点とする TAAA が、南アの現状とあわせて反アパルトヘイト運動から学ぶべきことをさらに提示していくことを 期待したい。

右の写真:

TAAA が南アのデベトンに送った移動図書館車が 1998 年 7 月にダーバンで開催された図書館イベントに展示された。マンデラ大統領（当時）が移動図書館を訪ねた。

吉田　昌夫（前アフリカ日本協議会代表、元中部大学および日本福祉大学教授）

アジア・アフリカと共に歩む会が創立 20 周年を迎えるとお聞きし、その活動を最初の頃から知っていた支援者として、よくこのような大変な仕事をつづけてこられたと、関係者のご苦労をしのぶと共に、移動図書館を南アフリカにつくるという、子どもたちを主な対象とした魅力的な援助は、さぞかし現地で喜ばれる効果をもたらしただろうと嬉しい気持ちにさせられました。

アフリカの子どもたちが読む本が少なく、また大きい都市にはあっても遠隔地では図書館の様なものは存在しないというところに、本を積んだ車を移動させて、こちらから子どもたちに近づくというアイデアを実現させたことは、とてもよかったと思います。車輌を貰い受ける交渉も骨が折れたでしょうが、寄付を受けた本の梱包作業と発送もさぞ大変な仕事だったでしょう。

しかしこれまで本を読むことができなかった子どもたちが、移動図書館の車がやってきた時の、目を輝かして喜ぶ姿は、私にも十分想像することができます。最近はコンテナを据え付けて図書館にしたり、菜園をつくったりする活動に発展しているようですが、このように会を成長させ、維持してきたスタッフの方がたの労をねぎらいたいと思います。

楠原　彰

野田さん、みなさん。TAAA 創立２０周年の歴史に心より敬意を表します。

僕自身は南ア（問題）　―反アパルトヘイト運動が中心でしたが―　から離れて２０年近くになります。それでも、現在の南アフリカの状況に心痛めています。心痛めているのは、やはりこの２０年間ほどの日本の状況も同じです。日本の僕たちも次の世代に、たしかな人間の希望、いのちの希望を遺しえないでいます。同時代の大人として僕は責任を強く感じます。残された短い時間のうちに自分には何ができるか、考えています。

それにしても、アフリカ、とりわけ南アフリカ（問題)とのかかわりは、僕の人生の支えでした。南ア問題、つまり反アパルトヘイト運動を選び、引き受けることによって、僕はもっとも苦悩が多く揺れの大きい２０代後半から５０代前半の人生を、なんとか生き抜いてくることができた、という思いがあります。

日本と南アフリカの人々(ピープル)に希望の橋を架けようとする TAAA の運動にかかわっておられる、野田さんや若い人たちの人間としての〈選択〉に、深い敬意を表する次第です。

大浦　敏恵（青山学院大学高等部　司書教諭）

TAAA 様の創立 20 周年おめでとうございます。20 年にも渡り地道な活動を続けてこられたことに頭の下がる思いです。

TAAA 様に出会ったきっかけは、1993 年に掲載された新聞記事「南アに英語の本を送ろう」です。南アフリカに本を送るための郵送料が不足しているとの内容でした。教育に携わる者として深い感銘を受け、生徒達に働きかけ 1995 年から毎年古本市の売上金を寄付させていただくことになりました。近年は廃棄することになった英語の教科書類も役立ててくださり感謝しています。

寄付金額の多少にかかわらず送ってくださる丁寧なお礼状と、毎回送付してくださる会報は、生徒たちの大きな励みになっています。今後も TAAA 様の活動を陰ながら応援しています。

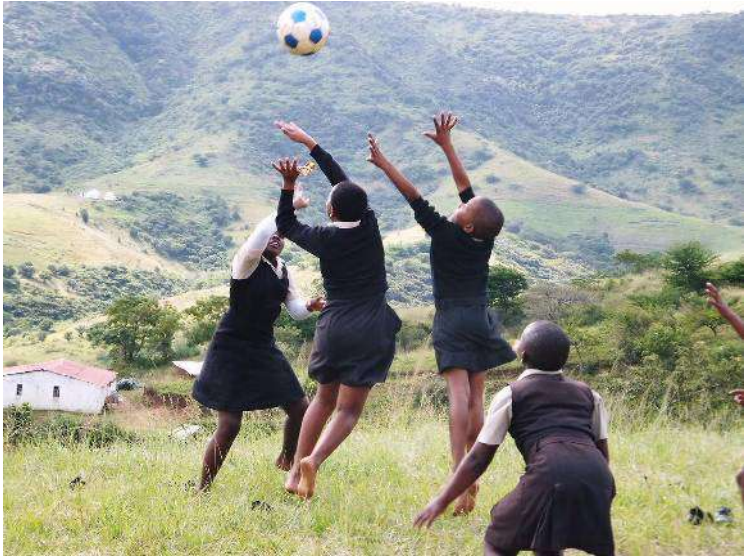
今村　嘉宏（元 JICA プレトリア事務所勤務）

TAAA 設立２０周年おめでとうございます。

私と TAAA との関係は、前職時代、南アフリカ赴任前に、知人を介して野田さんをご紹介いただいたことに始まります。南ア駐在中には、TAAA の南アでの活動の端緒となった ELET との仲介的な仕事もさせていただき、更に、帰国後も別の仕事で平林さんには現地でお世話になり、浅からぬ縁を感じているところです。

私と南アの関係は、高校時代に溯りますが、その後の駐在を経て、家族共通の友人もでき、２、３年に１度は里帰りして、細々と縁を結んでいます。「自由南アフリカの声」でもわかるとおり、南アは世界でも有数の格差社会です。TAAA の活動拠点は、文字どおり何もない地域かもしれません。でも逆に見れば「不要な物は何もない」環境での生き方を教えてくれる場所でもあります。TAAA の活動を通して、南アの人達のみならず我々日本人も多くのことを得られるよう願っています。

右：自分たちの写真が載った TAAA パンフを見るブボンガネ小生徒たち



鈴木　直志

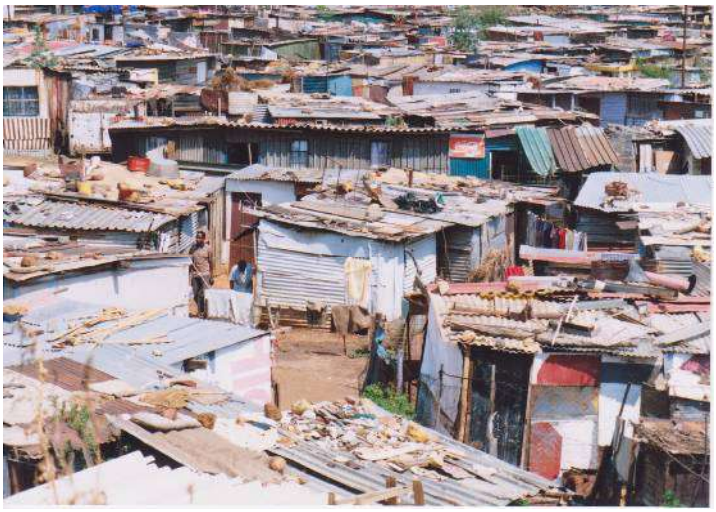
ＴＡＡＡ20 周年にあたり、野田代表始め皆様に心からお祝い申し上げます。

貴会 20 周年が、私にとってとりわけ感慨深いのは、それが丁度、私の社会人人生と重なり合うからです。読売新聞社に入社、浦和支局に配属された私が、貴会事務所を取材で訪れた時、まず驚いたのは、雑然と積み上げられた英書の山でした。生意気な若造の取材に快く応じて頂き、活動を紹介した記事は、お陰さまで、ある日の埼玉版でトップ扱いの記事となったのでした。それからも何度か取材に伺い、記事にさせて頂きました。文字通り青春の日々の思い出です。

青雲の志を抱き社会に乗り出した貴会と私ですが、20 年の節目に顧みれば、貴会の活躍は、私には眩いばかりです。改めて国際貢献の在り方が問われる中、地道にぶれず、顔の見える支援を続けてきた貴会は、私にとり、社会人としての自分を励ますランニングメイトです。30 年、40 年…これからも良き目標でいて下さい。

萱場　俊克（株式会社コンセプション　代表取締役社長）

TAAA２０周年おめでとうございます。
長い間チャリティー活動を継続なされている事に感服しております。素晴らしいですね。
私と TAAA の出会いはあるニュース番組でした。
教育と農業支援、継続的なフォローと活動に賛同致しまして現在に至ります。
私は飲食店を仙台・東京で経営しております。以前、食を通して人の役に立てることはないかという思いから
その日の売上全額寄付という大胆なイベントを行ってきました。
”人に良いことをして差し上げれば、必ずそれは何かしらの形で返って来る”というホスピタリティー精神の教育にもなっております。
私達のチャリティーイベントも今年で 17 周年を迎えることができました。
”その日の売上全額寄付イベント”の寄付先の一つとして、これからも陰ながら応援させてください！
この度は、誠におめでとうございました。



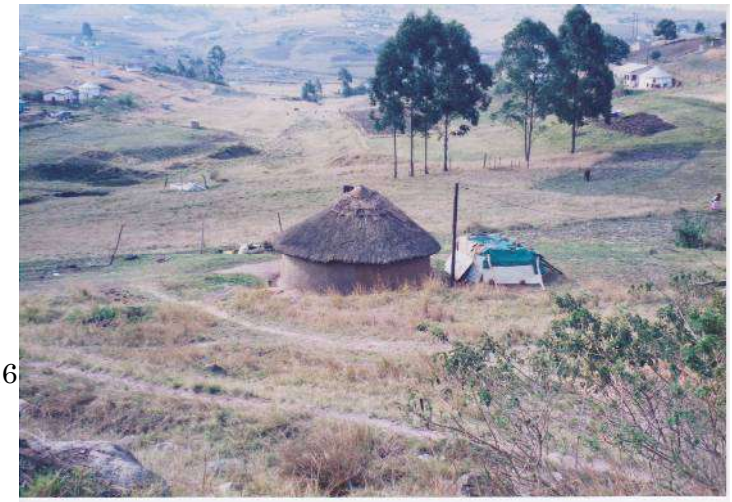
ソエトの一区画

伊藤　宏

創立 20 周年おめでとうございます。

2010 年秋に南アフリカへ観光旅行した際に、ソウェト地区へ 2 時間あまり訪れる機会がありました。地区内部をバスで一走りした後、ヘクター・ピーターソン記念碑やマンデラハウスのあたりを散歩し、その近くのローカルレストランで昼食をとりました。マンデラハウスへ入場を待つ生徒たちが、賑やかに手を振ってくれました。日本人現地ガイドによると、ソウェト地区は一種のショウルームできれいになっているが、まだまだ酷い環境のところが多いとのことでした。

継続は力なりという言葉があります。ＴＡＡＡの今後ますますのご活躍を祈念しています。



クワズールーナタール州の田舎の風景

井関　純

希望の灯をかざす！

TAAA が、成人を迎えられたこと、心からお祝い申し上げます。長期にわたって、南アフリカの人々とりわけ児童の教育支援に、野田様はじめ皆様が取り組まれて来られました。日本に住む心ある会員各位の思いをまとめ、数多くの団体や会社をまきこみ、地球的規模で、図書館車と英字書物等を配付し続けるシステムは、類まれなものでしょう。

近年、そのシステムは、進化を増して、菜園活動とサッカー普及活動にも発展の由！　TAAA の成長に従い、知育プラス食育・体育へと支援内容が、厚みを増している様です。マンデラ以後の国内政治が停滞気味に見える現状ながら、時代を背負う若者に、必ずや勇気と希望を与え続けてくれると信じます。

京都の片田舎に住み、具体的なお手伝いができない者ですが、TAAA を支える縁の下の力持ちで居たいなと願うこの頃です。

塩野谷　憲史

私などが初めて TAAA を知ったのは、平成 5 年の週刊誌ででした。ボランティアのかたがたの苦労を知らない私ですみません。

平成 6 年あたりから新聞でマンデラさんの名前やアパルトヘイト廃止になったような記事を少し見たつもりでしたが、最近の記事では、まだまだ白人と黒人の格差は 6 倍くらいあるとか、それによって（平林さんの報告によれば）治安が相変わらず悪いと教えてもらいますと、今後とも TAAA の皆様には今迄通りご苦労して頂く事かと思います。

皆様、普段はご自身の勤めもある事と思いますので、どうか無理をなさらず、これからも頑張っていただきたいと思います。

安部　弥生

二十周年おめでとうございます。

私は本と勉強が好きで、図書館でアルバイトをし、幸せなことに六年前からは大学生もやっています。そんなこんなに時間をとられ、活動のお手伝いはさっぱり出来ずにいますが、寄付だけは続けています。そして、たとえ〝お金だけの関係〟でも、同じく本好きの南アの子供たちと関われていることがとてもうれしいです。これも TAAA がこの国にあり、活動し続けてくれているおかげですね。本当に感謝しています。

また、TAAA の会報を読むときにいつも思うことがあります。南アの人々もきっと、私と同じ、毎日を泣いたり笑ったり怒ったり考えこんだりしながらゆきくらしているだろうな。そうやって世界はちょっとずつ変わっていくのだろうな。・・・という具合に、ひとしきり感慨にふけり、勝手に共感をおぼえて、とどのつまり会報が届くたびに寄付をしてしまう私です。どうぞこれからも頑張ってください。

小宮山　明子

新聞でTAAAの活動の新聞記事を読んだのがきっかけで参加しました。
南アに送る本の梱包の手伝いや、報告会に参加しているうちに、遅まきながら、南アの実情や移動図書館車の寄贈の大切さを学びました。

野田さんが奮闘した、ボランティア貯金の助成金の授与式に誘われて、一緒に与野郵便局に出向いたのを覚えております。数年で北陸に引っ越しましたので、実際に参加できたのは、短期間でしたが充実していました。

夫が中古車輸出会社を立ち上げ、私もアフリカ諸国に同行しました。まだ南アにはいったことはありませんが、彼の地の子供たちも、輝く目をしているのだろうかと、思いをはせています。

大久保　忠人

TAAA が零からスタートして今日までの 20 年間、そこに関わってこられたスタッフの方々の活動は、誰でも時には思い浮かべることのある「自分も何か人道的な貢献を」といった情感だけで成し遂げられることではないでしょう。
手本の無い新たな舞台を創りあげてそこで役割を果たし続ける間には、周りからでは理解の及ばない人知れぬ負担や葛藤、それを乗り越える創意やチームワーク、そして地道なガンバリがあったのではと想像しています。そしてその成果は、アフリカの人々のこれからの生成に深くしみ込んで、花開くことでしょう。

周りからただ応援するだけの者にとっては、足ること知る自身の生活の手軽なエクスキューズでもありますが、合わせて日常では接することのない遥か遠いアフリカの地の実情を垣間見て、少しですが思いをいたす機会でもありました。20 年間の活動に、心からの敬意をお伝えいたします。

斉藤　江津子

アフリカの発展に期待

今までアフリカの事情には、まったく無知でおりましたが、野田さんを通してこの活動を知り、アフリカが多くの未知の可能性を持った地域らしいことを知りました。アフリカの文化、産物など目にする機会は少ないものの、木彫りやアクセサリーなどにしても独特な生き生きとした感性やセンスが感じられ、今のアートや服飾の流行に刺激やヒントを投じてくれている気がします。先進国と言われる私達の国も振り返ると捨て去ってきたものも多く、これでよかったのかと疑問を抱くこの頃ですが、アフリカの人達のこれからは自然や人間のあり方を大事にしながら調和のある発展を遂げてくれることを祈りたいと思います。

千綿　京子

現代の「ブック・ウーマン」野田さん

絵本「ぼくのブック・ウーマン」（ヘザー・ハンソン文・デビッド・スモール絵）「荷馬図書館計画」は 1930 年代の米国、家の近くに学校も、お店も、図書館もない土地でくらす子どものために、図書館の本を運んで無料で貸し出した制度。ブック・ウーマンは、馬やラバにのり、2 週間ごとに険しいルートをたどって本を運んだ女性です。

当時とは、交通事情、流通手段、生活習慣等は著しく異なり、本はあふれるほどに出回ってはいるものの、必要とされる全ての場にいきわたっているわけではありません。「豊かな本の世界を手渡そう」「１冊の本が人生を変える」のおもいで、２０年、TAAA を続けてこられた野田さんは、まさに、現代の「ブック・ウーマン」です。

創立２０周年と会報「自由南アフリカの声」No. ６０、この二つの数字が物語る「継続は力」に心からの敬意をこめて「TAAA 創立２０周年おめでとうございます」を申し上げます。

高柳　俊哉（さいたま市議会議員）

アジア・アフリカと共に歩む会（TAAA）の 20 周年、おめでとうございます。

国境を超える連帯を口にすることは容易いですが、実際に具体的な支援を継続していくことがいかに難しいか！
TAAA が南アフリカの未来を担う子どもたちに英語の本や移動図書館などをおくる活動を今日まで持続的に進めていることに心よりの敬意を表します。

かつて南アフリカには、悪名高きアパルトヘイト（人種隔離政策）がありました。多くの人々の闘いによりこの政策は撤廃されましたが、人種・民族差別や偏見が世界から消え去った訳ではありません。私も自らの大きな活動テーマとして＜多文化共生の地域づくり＞があり、この間も入管法や住基法改定の問題についても取り組んできたところです。

「地球的規模で考え、行動は足元から！」という言葉があります。南アフリカの人々と私たちとの“絆”をより強いものにしていくためにも、これからも応援していきます。

～南アの皆さんからのひとこと～

★マーヴィン・オグル（C.E.O.(ELET)）
TAAA 20 周年おめでとうございます。アフリカの教育及び社会的発展のために TAAA が続けてきた素晴らしい仕事に対し、心からの感謝を野田千香子さんとその素晴らしいチームにお伝えしたいと思います。

南アフリカにおけるたくさんのプロジェクトの実施において ELET（Environment and Language Education Trust）が TAAA のパートナーとなれたことを光栄に思います。

私たち ELET は TAAA と常に楽しく仕事をしてきました。その寛大な支援によってたくさんの人々が助けられてきました。
私たちの学校の多くは、いまだにTAAAが送ってくれた本を使っていますし、学校菜園は子どもたちのために作物をもたらしてくれます。またエイズピア教育プログラムに対するサポートは、たくさんの命を救っただけでなく、何よりたくさんの希望を与えてくれました。

TAAA が南アフリカと日本の人々との協働に益々貢献されることを、そして ELET と TAAA が教育と社会の発展のための共通のプロジェクトのために共に働くことができる日が来ることを祈っています。

愛をこめて、ご多幸をお祈りします。

デベトンにガレージと書庫が完成　1996年　左はベントレイ氏

★デイブ・ベントレイ（Chairman – Ekufundzeni）
　日本に住む見知らぬ人たちのグループから一通の手紙が届いたのは 1993 年のことでした。それは、はるかかなたの地から南アフリカの現状を変えたいと望む人たちのグループでした。手紙の宛先は、特に私というわけではなく、彼らの夢の実現に手を貸せる人ならだれでもよかったのです。それが TAAA と Ekubundzeni(旧 MEI)の長きにわたるパートナーシップの始まりでした。

　それは日本から私宛てに届いた袋詰めの本から始まりました。 郵便局から郵便受けに入れるには大きすぎる荷物が届いているという知らせを受け取った時のことは忘れることができません。私はその時大きな箱が一つだと想像していたのですが、実際に届いたのは 20 袋もあり、全部運ぶのに郵便局まで 3 往復もしなければなりませんでした。

　1996 年には移動図書館の運行という夢を分かち合いました。野田さんから日本に移動図書館車があるとは聞いていました。それが知らぬ間に、一台が船便でダーバンに送られたというのです。500 キロも離れているというのに！私は輸入許可書もなにも持っていなかったので、必要な書類を揃えて家まで移動図書館車を運転して運んでくるまでに 6 カ月かかりました。
それから TAAA の資金援助を受けて保管庫を作るのにさらに 6 カ月を要したのです。

　15 年後の今、図書館車も保管庫もいまだ健在で、援助を必要とする 30 校 25000 人の生徒たちの役に立っています。
これらはすべて、TAAA の熱意と激励がなければ実現しませんでした。TAAA の献身を通して神が素晴らしいチャンスを下さったのです。彼らから届いた最初の手紙、袋詰めの本、移動図書館車の到着、すべてが、南アフリカの教育を向上させたいという私の夢の実現のための力となりました。
ここに 20 周年を迎える TAAA に改めて敬意を表します。あなた方は自分たちの夢をかなえました。TAAA のおかげで南アフリカの恵まれない子どもたちの状況は確実に変わりました。それは単に 15 年たっても図書館車が動いているからというわけではありません。私たちが共に作り上げたモデルが今、南アフリカのいたるところで広がっているからなのです。
それはすべて TAAA が動き始めてくれたおかげなのです。あなた方はいつも私たちの心の中にいます。

★ジェーン・ジャクソン（Bathurst　西ケープ州）
おめでとう！TAAA
久我祐子さんから届いた TAAA20 周年を知らせる手紙を手にした時、私の胸には幸せで充実した時間の記憶が次から次へとよみがえってきました。私は 1990 年代にダーバンの ELET（English Language Educational Trust）で教材開発の仕事をしていましたが、野田千香子さんとその仲間たちは、ELET を訪れる他のどの援助団体とも異なっていました。彼らには独特の雰囲気がありました。それは思いやりのある友好的な態度、共感を伴う関心、そして礼儀正しさからくるものでした。ディレクターの Mervin Ogle、リソース・センターのコーディネータ Julia Reynolds、そして私は、何年もかけて TAAA と信頼関係を築き、我々のプロジェクト参加校の子どもたちは幸せにもTAAA の寛大な援助を受け取ることができました。子どもたちは、TAAA が日本で集めて南アフリカに送ってくれた、まさに数千冊に及ぶ英語の本を手にすることになりました。積荷が着くたびに私たちのもとに届けられる箱を、興奮しながら開けて本の仕分けをしたときのことをはっきり覚えています。それらの本はプロジェクト・コーディネータと共にクワズールー・ナタール州の隅々に届けられたのです。

左から北爪、野田、ジュリア、平林、ジェーン

そしてその後すぐに、本に続いてバスがやってきました。その再生された移動図書館車に本と ELET の教材を積み込んだときのことが今でも思い出されます。夫とともに自らバスを運転して巡回に出たことも二度ほどありました。そしてまた、日本訪問は私にとって大きな喜びと興味深い経験となりました。日本で、ELET のプロジェクト地域の子どもたちにとって読み書きの能力を獲得することがいかに重要かを人々に伝えるお手伝いをしました。私の日本滞在が興味深く価値あるものになるようにと、TAAA のたくさんの友人たちが私のために時間をさいてくれました。空港で私を迎えてくれた浅見さん、移動図書館車の巡回に私を同行させてくれた北爪さんと彼の同僚たち。曲がりくねった道をたどりながら埼玉の山間部を訪れた楽しいひと時。
冷たい空気にほほを赤く染めた小さな子どもたち、子どもたちだけでなく様々な年齢層の人たちが移動図書館車に集まってきましたね。また野田千香子さんのお宅に泊めていただいたこと、久我裕子さん始め TAAA の友人たちと過ごした時間、そのおかげで日本人の生活に触れることができたこと、すべてがとても貴重な思い出となりました。

南アフリカの子どもたちのために TAAA がしてくれたこと、そして今もまだ継続するその素晴らしいプロジェクトに感謝いたします。感謝の気持ちは私個人の強い思いでもあります。私が仕事で出会ったパートナーの中で、最も温かく最も親密な繋がりを感じることができたのは、あなた方 TAAA の友人たちだったのですから。

★ジュリア・レイノルズ（旧姓：ソスキン）（元 ELET のスタッフ）
TAAA 創立 20 周年に寄せて
1990 年代の初め、私が ELET の資料室で働いていたとき、Art Works Trust のリズ・パーマーさんが TAAA の野田千香子さんを紹介してくださり、設備が不十分なダーバンやその周辺の学校を支援していただくことになりました。

これが私たちの、そして私たちが奉仕する地元コミュニティの人々の人生を豊かにすることになる冒険の始まりでした。

日本の皆さんが寄付してくださった大量の英語の本を受け取るために必要な通関書類を揃える大変さに最初のショックを受けましたが、それが終わったと思ったら、次の難関は本の配布に使う移動図書館車の受け取りでした。移動図書館車が来たことで、私と、のちに資料室アシスタントのシボンギレ（シボ）・ルワツァさんは、安全で快適な街中の資料室を出て、起伏に富んだ農村部に出かけることになりました。素敵な日本語の表示とシンボルのついたユニークな車は、どこに行っても注目の的でした。移動図書館車を買いたいという人までいましたが、その申し出を私たちは笑いながら断ったものです。

未舗装で、浸食を受け、ほこりっぽく、標識がめったにない道を、不案内ながらも敢然とすすみ、目的地にたどりついて、とても温かい歓迎を受けると私たちはほっとしました。私たちを受け入れてくれた献身的な先生方は、TAAA から寄付された本について、読書、調べ物、言語のスキルを伸ばすのに役立つと、とても感謝していました。のちに、農村部やタウンシップの先生方とのこのような協力関係は、シボと私がファシリテーターとなって、おもに土曜日の朝にワークショップを開催する図書館アウトリーチ・プログラムへとつながりました。ELITS（教育省の学校図書館部門）のシポ・ロンボさんとパット・マグワザさんが教材や情報の面で私たちを助けてくれました。
このような始まりから今までの間に、TAAA はクワズールー・ナタール州の多くの人々—老いも若きも—の人生を本当に大きく変えました。農村部の学校は海の向こうの人々の友情と支援に感謝しています。私たち ELET スタッフも、TAAA の皆さんの献

身、純然たる手作業、無私の寛大さへの感謝を抱きながら成長してきました。毎年、千香子さんや他の皆さんが訪ねてこられて、学校にお連れできるのを楽しみにしてきました。報告や今後の計画についてのミーティングのほかに、一緒に食事をすることも楽しみでした。ビーチ近くのウェスト通りの端っこにある美味しいインド料理レストランで、私たちが厚かましくもマイルドなカレーが欲しいと言ったので、店主に説教されたことを覚えていらっしゃるでしょうか。結局、その店で出されたカレーは「スパイシーでオイシー（oice：スペリングがあっているといいのですが！）」と認めざるを得ませんでしたね。

TAAA を通じて私たちは、ベノーニのメソジスト NGO をはじめとする他の NGO の活動、彼らがコミュニティにしている貢献についても知るようになりました。私たちは車高の低い移動図書館車を、当地よりずっと平坦で走りやすいハイフェルトのベノーニに送ることにしました。

TAAA の献身的なメンバーの皆さんがアフリカの片隅にいる私たちのためにしてくださったさまざまなことを思い返すのは素晴らしいことです。あなたたちの誠実さ、温かく寛大な心、友情に本当に感謝しています。心の中で、お祝いに同席し、TAAA のすべての素晴らしい方々に乾杯したいと思います。20 周年おめでとうございます！　主イエス・キリストがあなたがたを祝福し、あなたがたを守り、御顔を向けてあなたがたを照らしますように。
愛と感謝をこめて　（とても暖かい）ダーバンにて

★サンディーレ・シリル・ムカディ（南ア NGO ウムトンボ）
20周年おめでとう！　TAAA がプロジェクトを長く続けてきたことは実に素晴らしいことです。成功の鍵は教育であるということを、南アフリカの人達に示す最良の仕事をしてくれています。TAAA が永遠に我々と共にありますように願っています。

TAAA 創立 20 周年記念報告会・レセプションの報告

丸岡 晶　（副代表）

1 月 12 日（土）、さいたま市の「与野本町コミュニティセンター」にて、TAAA 創立 20 周年記念報告会・レセプションを行いました。報告会に先立ち、野田・前代表／現事務局長と久我・現代表から、20 年間の支援・協力のお礼と、今後に向けた挨拶をさせていただきました。野田事務局長は、20 年間の歩みの概要を紹介し、久我代表は、あらゆる人種差別の禁止を明文化している南ア憲法にも触れながら、現在の課題について触れました。

平林・南ア事務所代表による報告では、当会の活動の３本柱である「図書支援」「菜園活動」「サッカー支援」の概要をお伝えしました。TAAA の原点である「図書支援」については、南ア政府も力を入れはじめており、「菜園活動」については、JICA のプロジェクトが終了しましたので、今後も現地で継続されることがポイントとなります。また、「サッカー支援」は地域の学校と TAAA のコミュニケーション強化にもつながっています。

現地の報告に続いて、ゲストの南ア NGO「ウムトンボ」スタッフのサンディーレ・ムカディさんから、サーフィンを通じたストリートチルドレンの支援について、報告していただきました。

以下の方々から暖かいメッセージを頂戴いたしました。

☆株式会社商船三井　経営企画部　ＣＳＲ・環境室長　永田順一様
　”図書輸送を通じた支援は、社内報を通じて知られており、社員の誇りです。”

☆特定非営利活動法人アフリカ日本協議会　事務局長　斉藤龍一郎様
　”本を通じて、情報をどうやって伝えていくかが、大切だと思います。”

☆元アフリカ日本協議会代表　元中部大学教授　　吉田昌夫様
　”本は確実に喜ばれます。本の支援というのは、良い着眼点でした。”

☆さいたま市議会議員　高柳俊哉様
　”市民が市民に手を差し伸べることは素晴らしく、多文化共生が大切だと思います。”

☆日本貿易振興機構アジア経済研究所研究員　　牧野久美子様
　”南アと日本は、今後、支援する・される関係から、課題を共有する関係になってほしいと思います。”

☆動く→動かす　代表　津山直子様　**（写真）**
　”TAAA は現地の山奥まで出かけていますが、遠い日本と南アがつながっていくことが大切です。“

☆ＴＨＡＮ球プロジェクト　代表　森直之様
　”南アではサッカーのコーチや監督が不足していますので、雇用創出にも貢献していきたいです。”

今後ともご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

ＴＡＡＡの年譜

年度	主な活動	英語の本寄贈（冊）	移動図書館車送付（台）	算数セット	その他	報告会（回）	会報（回）
1992	TAAA 設立・英語の本を集め、南アフリカの学校や NGO へ送付	7,855				2	2
1993	南アへ図書支援	28,540				1	2
1994	南アを訪問・図書支援	14,698				1	2
1995	南アを訪問・図書支援・移動図書館活動　（国際ボランティア貯金助成金）	31,365	ﾊｳﾃﾝ州 KZN 州　2		バッグ 819 個	1	3
1996	南アを訪問・南アに移動図書館ベース建設（　同上　）	20,616	ﾊｳﾃﾝ州　2			1	3
1997	南アを訪問・南ア NGO スタッフを招く・南ア移動図書館活動（　同上　）	13,176	ﾊｳﾃﾝ州 西ｹｰﾌﾟ州　3		バッグ 550 個	1	3
1998	移動図書館活動・図書支援（　同上　）	34,210	ﾊｳﾃﾝ州　1			1	3
1999	埼玉県国際貢献賞受ける。南ア訪問・移動図書館活動（　同上　）	10,100			地球儀 9 個	2	3
2000	車送付記念式典・TAAA 南ア事務所開設・移動図書館活動	13,804	ﾊｳﾃﾝ州 KZN 州　3		カバン 1,000 個	2	3
2001	河合塾が本収集に協力・移動図書館活動	28,863			顕微鏡 10	2	3
2002	南ア訪問・TAAA10 周年記念式典・移動図書館活動	19,390	KZN 州　2			2	3
2003	南ア訪問・エイズピア教育事業・移動図書館活動・図書支援（JICA 草の根技術協力事業）	14,344	西ｹｰﾌﾟ州　1			2	3
2004	南ア訪問・エイズピア教育事業・移動図書館活動・図書支援（同上）	40,050	ﾊｳﾃﾝ州　1			2	3
2005	エイズピア教育事業・移動図書館活動・図書支援（同上）	13,662	KZN 州　4	77	椅子 60	2	3
2006	移動図書館活動・図書支援	15,753	ﾌﾘｰｽﾃｰﾄ州 KZN 州 西ｹｰﾌﾟ州　7	80	ｻｯｶｰﾎﾞｰﾙ 7 他	2	3
2007	南ア訪問・学校菜園事業 24 校・移動図書館・図書支援（JICA 草の根技術協力事業）	18,247	KZN 州　1	80	ｻｯｶｰﾎﾞｰﾙ 13	2	3
2008	学校菜園事業 24 校・移動図書館・図書支援　（　同上　）	15,964	KZN 州　1	118	ボール 21 縄跳び 2,020	2	3
2009	南ア訪問・移動図書館活動・図書支援（国際ボランティア貯金助成金）	15,203		10	裁縫セット ｻｯｶｰﾎﾞｰﾙ 10	2	3
2010	南ア訪問・移動図書館運行（国際ボランティア貯金）・学校菜園（JICA 草の根パートナー型事業）	13,573		34	裁縫セット多数 ｻｯｶｰﾎﾞｰﾙ 112	2	3
2011	南ア訪問・移動図書館運行・学校菜園（JICA 草の根パートナー型事業）・国内被災地支援	12,800		52	縄跳び 150 ｻｯｶｰﾎﾞｰﾙ 751	2	3
2012	南ア訪問・移動図書館運行・学校菜園（JICA 草の根パートナー型事業）・国内被災地支援	15,671		85	ｻｯｶｰﾎﾞｰﾙ 197	2	3

【合計】

本の冊数　397,884 冊
移動図書館車　28 台
算数セット　536 セット
サッカーボール　1,111 個

◆ 主な活動（2012年9月16日～2013年1月15日）　*下線は南アにおける活動*

9.17～18　ヒバディーン地域学校訪問　平林薫
9.19　ダーバンにて貨物通関・受け取りに関してのミーティング　平林
9.20　日本へ一時帰国　平林
9.23　打ち合わせ会議　久我祐子　平林
9.25～10.5　会報60号編集・校正　野田　西村
9.27　国際ボランティア貯金申請書提出　久我
9.29　TAAA 南ア代表平林薫帰国報告会　平林　久我　浅見克則　鯨井幸一　森直之　茂住衛　大友深雪　野田千香子　丸岡晶　高野千恵美　津山直子　米山周作　廣田通規（自治体国際化協会）
9.30　打ち合わせ会議　久我　平林
10.1　本その他を南アへ出荷立ち合い　北爪健一
10.3　1月の報告会場予約　西村
10.3～4　JICA第2四半期報告書作成・提出　久我
10.9　南アへ戻る　平林
10.11　JICAスタッフと会議　平林
10.12 本のレベル分け作業　久我　大友
10.12　サンタマリアインターナショナルスクールより本引取り　浅見　榊裕美
10.12　プンガシェ地域学校訪問　平林
10.15　ヒバディーン地域学校訪問　平林
10.15　輸出手続き書類送付　野田
10.15～20　会報60号の封入・郵送　高野　野田
10.16　JICA教師対象農業研修会開催（ヒバディーン）　平林
10.17　ヒバディーン地域学校訪問　平林
10.18　JICA教師対象農業研修会開催（プンガシェ）　平林
10.19・22　ドゥドゥドゥ地域学校訪問　平林
10.23　プンガシェ地域学校訪問　平林
10.29～30　プンガシェ地域学校訪問　平林
10.31　ドゥドゥドゥ地域学校訪問　平林
11.1　URDO（南アNGO）スタッフとミーティング　平林
11.2　ドゥドゥドゥ地域学校訪問　平林
11.3　アメリカンスクールインジャパンより本引取り　浅見　親戚のかた
11.5　ヒバディーン地域学校訪問　平林
11.6　TAAAオフィスに本の到着と搬入作業　平林
11.7　プンガシェ地域学校訪問と教育センターにてミーティング　平林
11.8　ヒバディーン地域学校訪問　平林
11.8　サンタマリアの本一部返却　野田
11.9　州教育省トゥートン・ムタルメ学区長Mrs.Zasimaとミーティング　平林
11.11　梱包作業　浅見　西村　高野　野田
11.11～1月　TAAA20周年記念誌原稿依頼・編集　野田
11.12　ドゥドゥドゥ地域学校訪問　平林
11.13　州農業省地域担当Mrs.Gidaとミーティング　平林
11.14　JICAスタッフミーティング　平林
11.15　JICA事業打ち合わせ会議　久我　野田
11.15～16　ヒバディーン地域学校訪問　平林
11.20　ヒバデイーン地域学校訪問　平林
11.22　エナレニ農場研修訪問（プンガシェ地域小学校2校）　平林
11.22～23　プレトリア出張（JICA訪問）　平林
11.26　クリスチャンアカデミーより本引取りとレベル分け　久我　茂住　大友
11.26～27　ヒバディーン地域学校訪問　平林
11.28　JICA事業打ち合わせ会議　久我　野田
11.29　JICAプレトリア事務所より事業最終評価訪問　平林
12.1　住所ラベル更新　西村
12.3　JICA事業会議　関心表明提出　久我　野田
12.4　エナレニ農場研修訪問（ヒバディーン地域小学校2校）　平林
12.5　ドゥドゥドゥ地域学校訪問　平林
12.4～10　JICA事業申請書作成　久我
12.7　ヒバディーン地域学校訪問　平林
12.8　TAAA作業と懇親会　浅見　丸岡　山口孝徳　西村　野田　久我　浦和学院高校から鮎澤美佳　大澤加奈子　大竹ひかる　小林美穂
12.11　JICA事業提案書提出　久我
12.11　プンガシェ地域農業グループメンバーとミーティング　平林
12.12　ヒバディーン地域ムシカジ農業グループメンバとミーティング　平林
12.13　JICAスタッフとミーティング　平林
12.14　ヒバディーン地域ムタルメ農業グループメンバーとミーティング　平林
12.18～21　JICA事業精算・報告書まとめ作業　平林
12.23　URDOメンバーとミーティング　平林
12.25　日本へ一時帰国　平林
12.28　JICAプロジェクト完了報告書提出　久我　平林
12月～1月　TAAA20周年記念イベント準備　丸岡
1.4　ミーティング　久我　平林
1.12　20周年記念報告会とレセプション　平林　サンディーレ　丸岡　久我　野田　西村　上林　鯨井　米山　茂住　津山　牧野　大友　梶村佐喜江　斉藤龍一郎　吉田昌夫
9月～1月　本その他の受け取り　北爪　野田